

一九五八年六月一日

# 谷川岳 の倉沢

# 工木沢沢奥壁中央カ

小森 康行  
服部 清次  
鳥井 義弘

谷川岳において、バリアンテ・ハンターがめざす最高課程の岩壁たるエボシ沢奥壁については、すでに「岳人」三六号に奥山章氏が書かれており、また一〇二号には古川さんの変形テムニールルートが紹介され、こゝは奥壁のノーマルルートとして、現在多くのクライマーの注目をあびるようになってきた。ところで、こゝでとりあげられる奥壁中央カンは、本年三月、雲表倶楽部および第二次R・C・Cの人々によって初登攀された凹状岩壁（「岳人」一七一号参照）と、奥壁正面ルンゼとを分け、Y字滝附近までダイレクトにのびる一大カンを指しているのである。

このカンの登攀は、昨年六月、第一回の本格的偵察を兼ね、古川、鳥井、それに私の三人によって、正面ルンゼをトレースした際、登攀の可能性に対するある程度のパーセンテージをみとめた。以来この中央カンの登攀の機会を狙っていたが、幸い近距離のため創立記念山

行として取り上るには最適だったので、本年六月、創立記念山行としてこのルートを初登攀した。この登攀に古川さんは奥さんが病気のため参加出来なかった。

パーティー、小森康行、服部清次、鳥井義弘、六月一日、雪の衣をぬいだ一ノ倉に、むとぎわ賑わう登攀者の群れ。朝焼が次第に消えるころ、それらの群れは、雪渓を辿りエボシ沢スラブを登る。そして、ルンゼに岩壁にザイルをさばくのた。

われわれは奥壁取付きバンドへ出て、最右端までトラバースすると垂壁になり、中央カンの末端に出た。オクターは私、服部、鳥井でアンザイレシ、アックは午前七時に開始された。

垂壁に走る縦リスにハーケンを打ち、吊上げでザイルアプミに立てば、頭上は四〇程ほどヒサシ状に出たオーパーハンクにおさえられた。左よりその上に出るため苦労したが、つゞくハンクにリスがなく、まむなく後退し

オーバーハングの下をザイルトキバースで右にまわりこ  
んだ。なおも垂壁であるが小気味よくはしるリスにハー  
ケンは唄い、アブミの使用でこゝを乗り切ることができ  
た。

白毛門を越えた朝の光がまぶしく全身を照らし出す。  
これからは草付きのミックスした急な岩を攀り①に達す  
る。こゝは中央稜側のオーバー・ハングの下でアンサウ  
ンドもはなはだしい。落石に細心の注意をはらいながら  
服部を迎える。次のピッチをスラブ状ルンゼの基部へと  
左上にルートをとった。乾いた岩はこの上もなく快適で  
ある。

スラブ状ルンゼの基部は緩傾斜であるが、リスがない  
ため、半分も入らないハーケンで確保しなければならな  
かった。仰ぐ凹状岩壁は悪相をつらね、積雪期登攀がし  
のばれる。こゝで三人は一度顔を合せ、いよいよ中央カ  
ンテの核心部登攀に移った。

リスのない壁を慎重に登り、オーバー・ハングの下の  
草付きバンドをはいずるようにして行くと垂壁につきあ  
たり、丁度ザイル一ぱいの声がかゝった。ここには確保  
できるだけの灌木が一本あるがハングのため立てない。  
ジツヘルを交代してその垂壁をまわり込むと、期待して  
いた岩だけのダイレクト登攀がそこにまっていた。指先

足先からクライマーのみが知る歓喜が全身にみなぎる。  
遠く滝沢スラブは不気味に光り、足の間から直下のエボ  
シ沢スラブには、南稜テラスへ急ぐ登山者が見え、南稜  
マ中央稜の登攀者は手にとるようである。

五米程小さなスタンスを利用して左へトラバースする  
と、すぐ向う側は深く切れ込んで正面ルンゼである。  
リズミカルな登攀をつゞけ、凹角状をなしたところで第  
四ピッチ終了のハーケンを打込んだ。鳥井が行動を開始  
し、服部からハーケン、カラビナが手渡される。仰げば  
エボシ岩は遙か上よりわれわれを圧する如く見下してい  
る。スタンスジツヘルのため、私はすぐビレー用ハーケ  
ンを使用して吊り上げ気味に登り、ミドルにジツヘルポ  
イントをゆるする。

バランスクラライミングをつづけて三〇米を登ったと  
き、五米位上にはオーバーハングが待っていた。ザイル  
はまだ一〇米ほどあるはずだ。ミドルにハングの乗越え  
を伝えると、あらかじめ目算したリスに合うハーケンを  
えらび、ハング乗越しにかかる。こゝには一抱えもある  
浮石が不安定にとどまっただけで危険度も高く緊張感を中  
るめられない。落石は絶対に出せない。南稜テラスから  
バルコニーから、われわれの登攀は多くの眼によって見  
まもられているのだ。

目算しておいたリスにハーケンを打てば、期待に反しリスは開いてしまった。間髪をいれず、ハンクの左上のリスに左ハンマーで第二のハーケンを打ち込んだ。が、その音色は鈍く、あまり利いているとは思えない。周囲を見まわしたがリスはなく、さりとて他にルートもない。やむなくハーケンをもとまで打込んで二段アブミをかけ、二回、三回と試した後、アブミに立つと体は空間に出た。空中に浮いたアブミは不安定で自由を与えなかった。アブミを引きつけるようにして左壁に移り、五米程登ってビレーイングハーケンを打つ。鳥井が行動して服部とジツヘルを交代しているのが直下に見える。

次のピッチには中央カンテのキーポイントとマークしたオーバハンクであるが、これは左に食い込む草付ルンゼを利用することができた。しかし、このルンゼの上部はチムニーとなって行詰っている。約五米で中程にケョックストーンをもつこのチムニーは、あまりに狭く、その基部には小さな浮石が詰っている。落石の危険を感じ一度は敬遠して右壁を登るべくハーケンを打ち吊り上げを行つたがスラブの壁は到底見込みがない。結局チムニーを登ることにして、ザックをハーケンでとめ、チムニーに取付いた。胸幅いっぱいの狭さと、スタンスレスでもすれば動きがとれなくなる。唯一のケョック・ストーン

を利用してその上に立ちエグレスを右に出ると小さなテラスがあつた。つづく服部がザックを上げ、私より幾分体重のある鳥井も、やはりこのチムニーには開口したようだ。

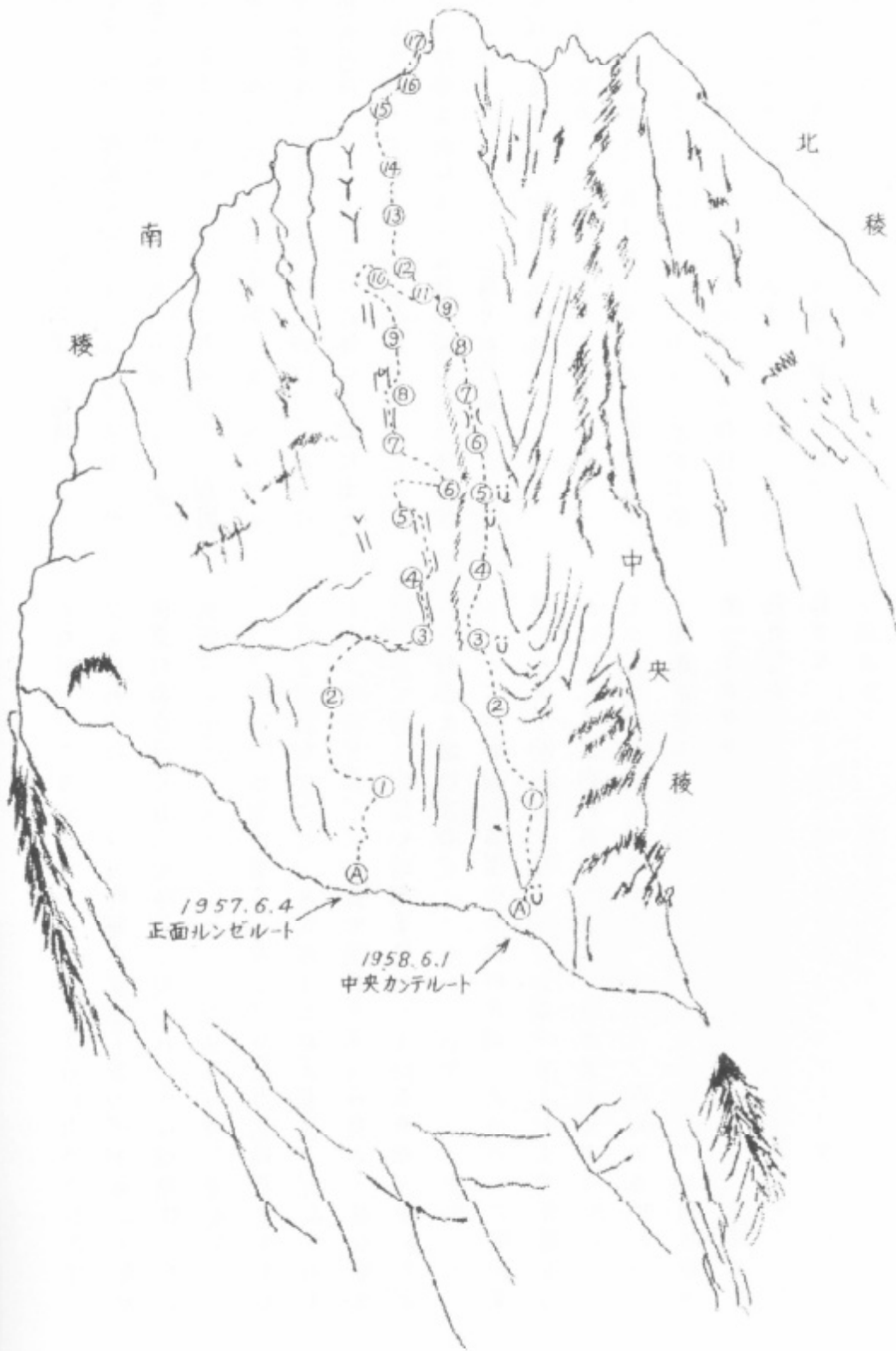
こゝから一ピッチ登るとカンテも終り快適なフェイスとなり、なおワンピッチをのばせば正面ルンゼよりのルートと合流する。一ノ倉の展望を楽しみながら遅い昼食をとり、残り少ない時間を気にして一五分程で腰をあげ、再び登攀を続行する。

一ピッチ目の巖壁の最後の懸場であるハンク壁を慎重に登り、⑫、⑬、⑭、⑮と灌木をまじえる登攀をつづけ、エボシ岩の基部へ達し、その裏側をトラバースして二ピッチを登り懸垂岩の下へ出た。時計は五時だった。服部、そして鳥井と三人顔を合せたとき、宿願の中央カンテが完登されたのだった。私達は喜びに交す握手を忘れなかつた。ほんのりと色づく石楠花の花が痕れを忘れさせ、エボシ尾根を辿れば、コップ状岩壁を吹き上げる涼風が汗ばんだ肌を通りぬけた。

縦走路より一ノ倉を見下すころ關いを終つた巖壁はもはや夕關につつまれていた。

後記。中央カンテの名称であるが、岳人一〇二号の古

# エポシ沢奥壁登攀ルート図



川さんの記録だと『奥壁右方カンテ』とされている。が、実際に登ってみると、その位置、または、奥壁の凹状岩壁ルートが開拓された今日、「奥壁中央カンテ」と呼称

した方が通当ではないかと考えたので、敢えてこう命名した次第である。

# 工ボシ沢奥壁ルート説明

## 正面ルンゼルート

- ④-① 30<sup>m</sup> 傾斜ゆるく快適
- ①-② 30<sup>m</sup> 最初は急なれど次第に傾斜は落ちる。
- ②-③ 30<sup>m</sup> ゆるい斜面を少し登ってバンドを右へトラバースして正面ルンゼに這入る。
- ③-④ 30<sup>m</sup> ギャイルが一ぱいになったところが天井でおさえられた洞穴。
- ④-⑤ 30<sup>m</sup> 洞穴の右手を登るとチムニーとなりエgresス辺が非常に悪い。
- ⑤-⑥ 30<sup>m</sup> 少し登って中央カンテの側面までトラバース。
- ⑥-⑦ 30<sup>m</sup> 草付きを登って正面ルンゼの中に這入る。(チムニー)
- ⑦-⑧ 30<sup>m</sup> チョック・ストーンを乗り越え右手の壁に出る。
- ⑧-⑨ 30<sup>m</sup> 噴層で快適
- ⑨-⑩ 30<sup>m</sup> 右から正面ルンゼに入り⑩の快適のテラスに達する。
- ⑩-⑪ 15<sup>m</sup> テラスからバンドに降りる。
- ⑪-⑫ 30<sup>m</sup> 草付きまじりの快適な岩場
- ⑫-⑬ 30<sup>m</sup> 問題の最後の悪場の垂壁を突破する。
- ⑬-⑰ 各ピッチは30<sup>m</sup> 草付きや灌木まじりで容易なクライム

1957. 6. 4

Party 古川 純一  
小森 康行  
鳥井 義弘

## 中央カンテルート

- ④-① 40<sup>m</sup> オーバー・ハングの下を振り子トラバース
- ①-② 40<sup>m</sup> スラッグ状ルンゼの基部へと左上に登る
- ②-③ 30<sup>m</sup> オーバー・ハングの下へ入る灌木あり。
- ③-④ 30<sup>m</sup> 快適なカンテ登攀。
- ④-⑤ 40<sup>m</sup> アンサウンド・ハングあり悪し。
- ⑤-⑥ 30<sup>m</sup> 草付きルンゼ
- ⑥-⑦ 25<sup>m</sup> チムニーの幅せまく苦しい登攀。
- ⑦-⑩ 90<sup>m</sup> 快適なフェイス
- ⑩-⑮ 正面ルンゼよりのルートと同じ。

1958. 6. 1

Party 小森 康行  
鳥井 義弘  
服部 清次

